

成人用ピアノ入門教材の比較研究(1)

— 黒鍵使用について —

杉山知子

I はじめに

ピアノを弾く上で黒鍵の問題は技術的にも心理的にもむずかしいものを含んでいる。保育者を目指す者のピアノ指導をしてみて感じることは、へ長調、ト長調のようにシャープやフラットの付いた曲はむずかしいと演奏前にすでに思ってしまうということである。そして1音にシャープやフラットが付いているだけでもその1音を白鍵で弾いてしまい、必ず弾き直しをすることを繰り返す者が多い。ところが、幼児の歌にはニ長調やへ長調の曲が多数あり、そういった黒鍵を用いる楽譜になれていることが非常に重要になってくる。

よく「ピアノ曲のむずかしいのを弾いているのに幼児の歌が弾けない」と言われる。これは、保育者を目指す者のピアノ教育と演奏家を目指す者の教育が、指導法・教材の両面において分離されていないために起こるものと考えられる。すなわち、保育者養成のピアノ教育が演奏家養成と同一の方法で行なわれており、保育者養成上の独自のものとして確立されていないために起こるものと考えられる。そのために教員養成系の大学や短大では、効果的な方法を見つけ出すために模索しているのが現状ではないかと思われる。たとえば「ピアノ小集団学習⁽¹⁾」とか「ピアノ指導についての実践的研究⁽²⁾」「電動オルガンによる集団授業の試み⁽³⁾」などというような様々な研究や実践が報告されていることがその裏付けといえる。

また教材では、萬・塚本の報告によると教員養成系短大においてはバイエルの使用が多いということである。⁽⁴⁾今回はこの教材面についてアメリカのものをとり上げて分析・研究を行なう。特にアメリカのものをとり上げる理由は、教材研究が盛んに行なわれており、また、幼少からでなく大人になってからピアノを始めたいという人、副科としてピアノを勉強したいという人のための教本も数多く出版されているからである。そして特に黒鍵の使用がどのようにになっているかという点から成人用入門教材9種類について比較研究し考察を加えた。

教本を分析することにより、その内容を判断する場合には分析要因の多い方が信頼度も高いのは当然のことである。導入の仕方とカリズムや音の提示の仕方、和声的であるか対位的であるかといった手法の問題、連弾の有無、一曲の長さはどうか、というように分析要因はいろいろ考えられる。その中で今回は黒鍵の使用方法に焦点を当て研究を進めた。それにより、教本を比較研究する第一歩としたい。

II 比較分析の方法と教材について

ピアノを弾く場合には白鍵に比べ黒鍵が弾きにくいということがある。これは黒鍵が上に突出しており、横幅が狭いために起こると考えられる。この黒鍵に対する技術的むずかしさと心理的抵抗を少なくするためには、指の筋肉感覚としても視覚的にも黒鍵に慣れることが大きなポイントになると考えられる。つまり黒

鍵を何度も弾くことにより、手首の調節の仕方や手首の柔軟性が養われ、また読譜上でも音の読みかえに慣れるのである。そこで黒鍵の扱いについて第1に調号の用い方と提示の仕方、第2に臨時記号の用い方、第3に黒鍵の指使いというように黒鍵の使用方法を分けて分析する。

教材は1929年から1970年までにアメリカで出版された9種類の成人用ピアノ入門教材である。これらは年代の古い順に次の通りである。

Ernest Schelling 他3名	『Oxford Piano Course』(1929年)
John Thompson	『Adult Preparatory Piano Book』(1943年)
John Schaum	『Adult Piano Course』1, 2, 3 (1946年)
Michael Aaron	『Adult Piano Course』1, 2 (1947年)
Ada Richter	『Piano Course — The Older Student』1, 2, 3 (1956年)
Robert Pace	『Music for Piano — for the Older Beginner』1 (1967年)
James W. Bastien and Jane Smisor Bastien	『Beginning Piano for Adults』(1968年)
Mark Nevin	『Piano for Adults』1, 2 (1969年)
D. C. Glover	『adult piano student』1, 2, 3 (1970年)

これから後は各教本を示す場合に教本名でなく著者名で表わす。『Adult Preparatory Piano Book』を示す場合に『トンプソン』とするような具合であるが『Oxford Piano Course』だけは『オックスフォード』とする。

Ⅲ 分析結果

楽譜で黒鍵を示す場合には二通りの方法が考えられる。すなわち第1は調号を用いるものであり、第2は臨時記号を用いるものである。つまり第1の場合は曲の始めに予め黒鍵になる音を示しておくものであり、第2の場合は曲の途中でその音のみ臨時に黒鍵とするものである。

1. 調号を用いる場合

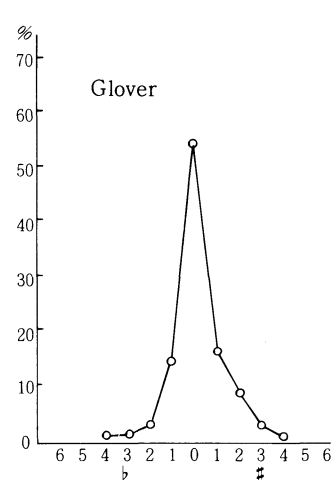
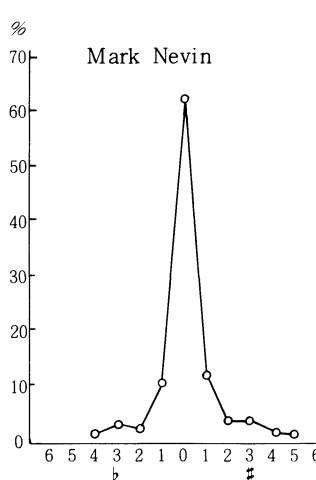
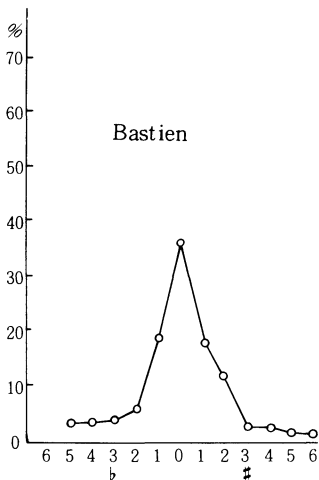
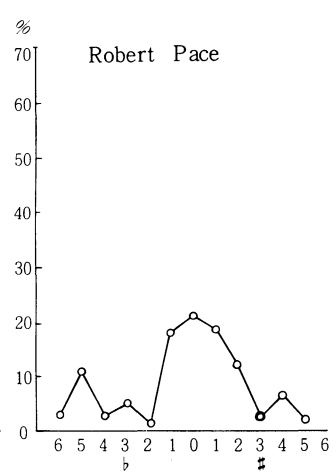
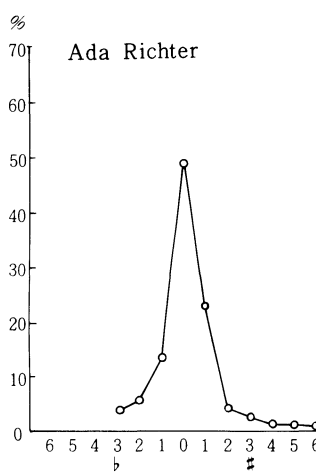
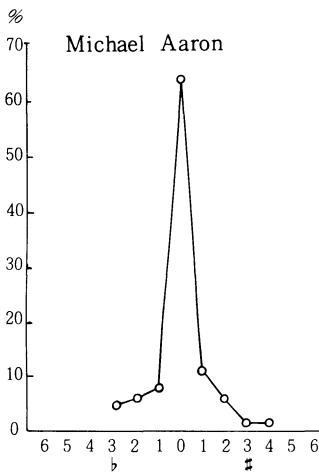
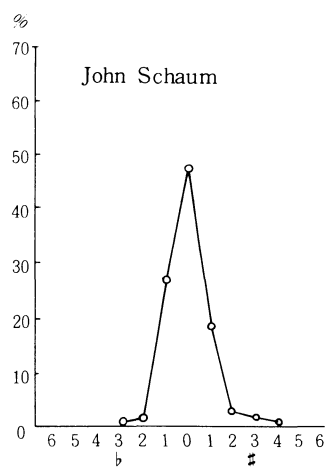
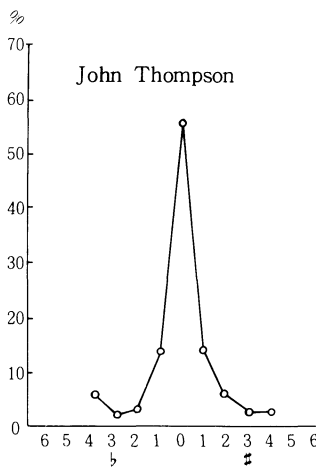
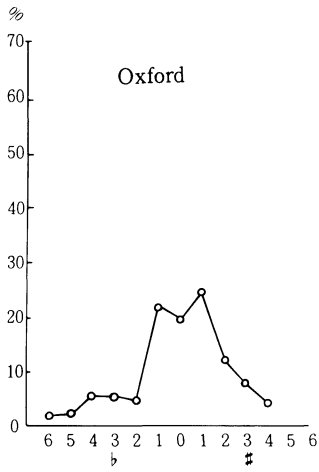
① 調号の用い方

図1は各教本に含まれている各曲がどういう調号で記譜されているかを調べたものである。そしてシャープ1コが何パーセントあるか、フラット1コが何パーセントあるかというように調号の種類と数とで表わしている⁽⁵⁾。グラフは横軸にシャープやフラットの数をとり、たて軸に全曲に対する比率を表わすようにしている。こうして9つのグラフを見ると大きく2つのタイプに分かれることが明らかである。すなわち『トンプソン』や『シャウム』のように0に集中しているものと『オックスフォード』や『ペース』のように比較的分散しているものである。この2つのタイプは調号にシャープ・フラットの付かない曲が多数を占める教本と、様々な種類の調号が用いられる教本というように分類できる。また『バスティエン』は後に述べる理由から『オックスフォード』『ペース』と同じく調号が分散しているタイプに入れる。

A. 調号集中型

これは『トンプソン』『シャウム』『アーロン』『リヒター』『ネヴィン』『グローバー』の6教本である。この中で一番集中度の高いのは『アーロン』である。これを見ると0が64%、シャープ1コが11%、フラット1コが7%となっている。調号の数はシャープ4コまで、フラット3コまでが用いられておりその種

図 1. 調号グラフ



類が『シャウム』と共に少ない。次に2番目に集中度の高いのは『ネヴィン』で0が62%である。シャープ1コが11%，フラット1コが10%であり，シャープ・フラットが各々2コ以上用いられるのは4%以下となっている。なお全教本の調号使用状況を資料1で表わしている。

B. 調号分散型

これは『ベース』『オックスフォード』『バスティエン』の3教本である。『バスティエン』はグラフの形からいえば0に集中しているのでAの集中タイプに分類されるが，集中率が35%と他の6教本より可成り低く，また調号の種類がシャープ6コまで，フラット5コまでと多岐にわたるのでBの分散タイプに分類した。この3教本の中でまず『ベース』から見ていく。

『ベース』では一番多い0が21%，次に多いシャープ1コが19%，フラット1コが17%と用いられ方が比較的接近している。そして調号の種類はシャープ5コまで，フラット6コまであり様々に，多岐にわたっている。『オックスフォード』は一番多いのがシャープ1コで25%，次に多いのがフラット1コで21%，0は20%で3番目であり，この点で他の教本と大きく異なっている。調号の種類はシャープ4コまで，フラット6コまでであり，ややフラットの種類が多い。『バスティエン』は一番集中している0が35%，次に多いフラット1コが18%，次のシャープ1コが17%，シャープ2コが11%となっている。

② 調号提示の仕方

図2は調号の提示順を表わしたものである。横に曲の進行を表わし，たて軸に調号のシャープ，フラットの数を表わしている。そして横軸上にシャープ・フラット0をとり，シャープを上，フラットを下にとっている。そして線の長いほどシャープ，あるいはフラットの数が多くなるようにしている。グラフで横に長い，短いと差のあるのは曲数の多い，少ないによるものである。

グラフを全体的な形で見ると大きく3つのタイプに分類できる。第1は曲が進むにしたがってシャープやフラットの数がふえるものである。これには『トンプソン』『シャウム』『アーロン』『リヒター』『ネヴィン』の5教本が含まれる。これらは調号順次提示型といえる。

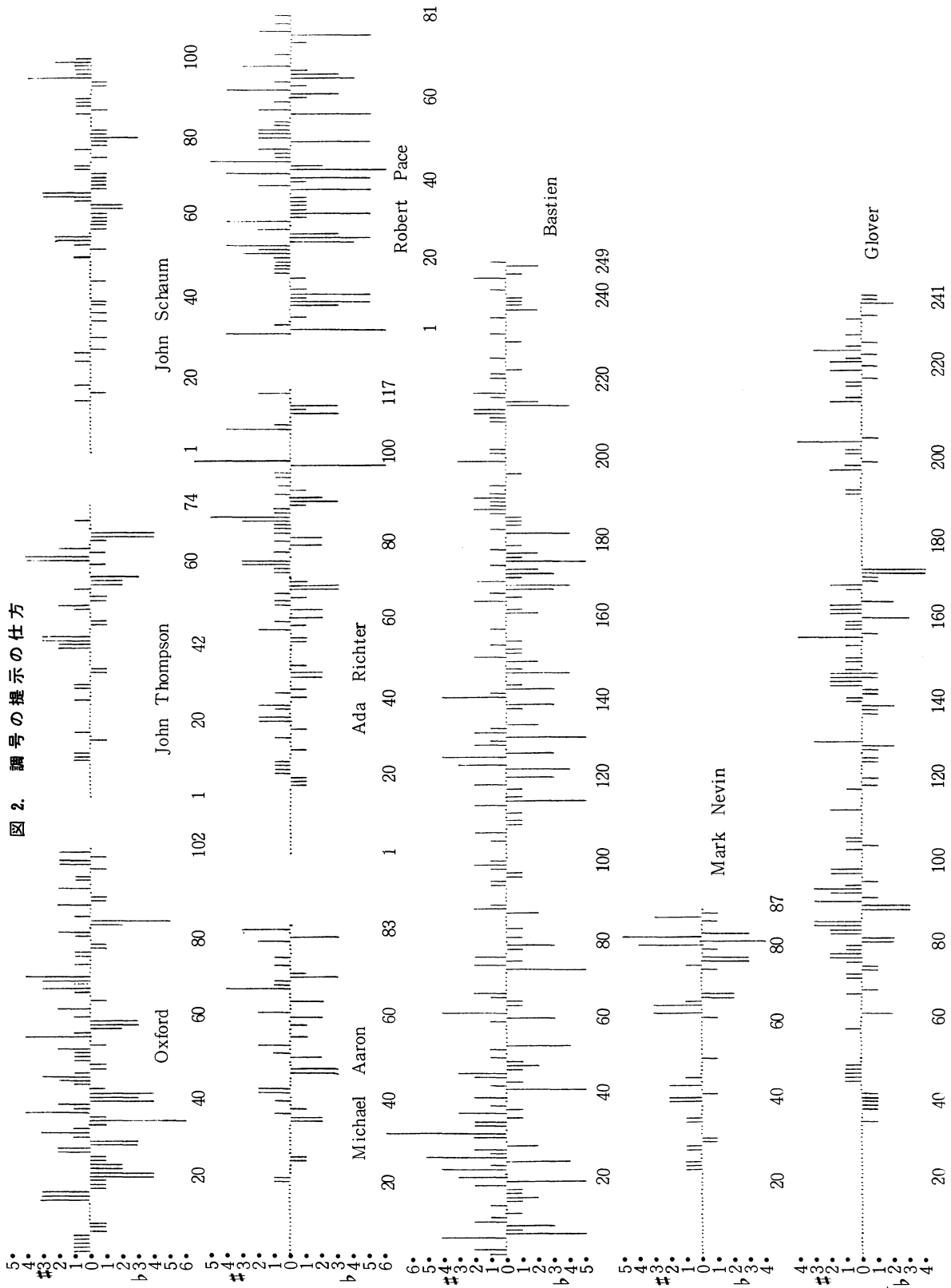
第2は『オックスフォード』『ベース』『バスティエン』の3教本で，始めから様々な調号が用いられるものである。これらは全調提示型といえる。そして第1の教本のように提示の仕方が秩序立っておらず，一曲一曲が全く自由にいろいろな調号が用いられる。

第3は『グローバー』である。これは曲数が多く，シャープやフラットの数が順次的にふえる部分もあるが，教本全体として順次的な提示にはなっていない。これは一部順次提示型といえる。

A. 調号順次提示型

これは『トンプソン』『シャウム』『アーロン』『リヒター』『ネヴィン』の5教本である。『トンプソン』では1曲から9曲がシャープ・フラット0，10曲から12曲がシャープ1コ，13曲から37曲までシャープとフラット0，シャープ1コ，フラット1コの繰り返しになっている。そして38，39曲がシャープ2コ，40，41曲がシャープ3コとふえ，さらに54，55曲においてフラット2コ，56曲がフラット3コとなっている。シャープ・フラット共に4コまでが用いられ，シャープ4コは60，61曲において，フラット4コは66，67曲に現われ，全74曲に対して次第に調号の数がふえている。『シャウム』についてみると1曲から13曲までが0，14曲から53曲までシャープ・フラット1コと0の繰り返し，54，55曲がシャープ2コ，62，63曲がフラット2コとふえている。さらに65，66曲がシャープ3コ，80曲がフラット3コ，95曲がシャープ4コとなり，これも全100曲に対して次第に調号の数がふえている。『シャウム』はシャープよりもフラットの調号の方

図 2. 調号の提示の仕方



が多いことも認められる。『アーロン』や『リヒター』『ネヴィン』を見ても先の2教本と同じくシャープ・フラット0に始まり、シャープ1コあるいはフラット1コから2コ、3コと次第にその数がふえていることがわかる。そして各教本の最後の方でその数が最も多くなり、『アーロン』はシャープ4コ、フラット3コ、『リヒター』はともに6コ、『ネヴィン』はシャープ5コ、フラット4コまで用いられる。ただし『リヒター』はフラット3コ・4コが用いられず急に6コが出現している。

このように5教本とも0に始まり最後の方でシャープ・フラットの数が多く用いられる調号順次提示型をなすのであるが、もう1つ、新しい調号が出現するたびに2曲以上同じ調号の曲が続くことが5教本に共通して認められる。

B. 全調提示型

これは『オックスフォード』『ベース』『バスティエン』の3教本である。まず『ベース』を見ると、シャープ4コに始まり、2曲目がフラット6コ、3曲目がシャープ1コ、4曲目0、5曲目フラット1コというように実に様々である。『オックスフォード』では1曲から5曲がシャープ1コ、6曲から8曲がフラット1コ、9曲から13曲が0、14曲から16曲がシャープ3コとなっている。また調号の数の最も多いフラット6コが第34曲、シャープ4コは第36曲というように全102曲の中で早い時期に出現している。『バスティエン』は全249曲と9つの教本の中で曲数が最多である。そして調号の提示の仕方は一曲ごとに変化しており、第1曲がシャープ1コ、2曲がシャープ2コ、0と続き6曲でフラット5コ、31曲でシャープ7コというように数の多い調号が早く現われている。これら3教本ともにシャープやフラットの数において順次的にふえるとか減るとかいうことはなく、また他の秩序にしたがってということもなく全く自由に様々な調号が用いられている。ただ『オックスフォード』は同じ調号の曲を何曲か続けて提示するという方法がとられている。

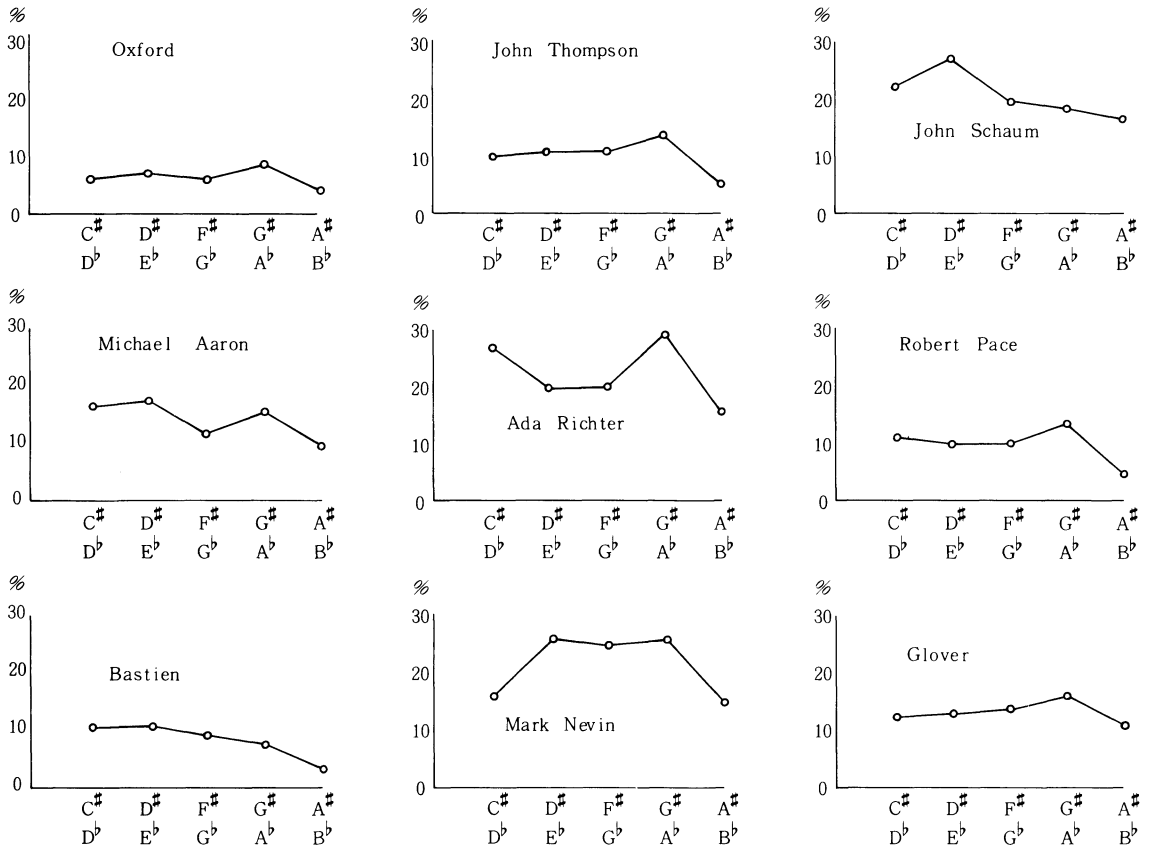
C. 一部順次提示型

『グローバー』がこの型に該当するが Level 1～3 を通すと241曲と曲数が多い。90曲くらいまで見るとシャープ・フラット0に始まり、フラット1コ、シャープ1コとなり、2コ、3コとふえる順次提示型を成す。しかしそれ以降は0を中心にシャープ・フラットともに4コまでの調号を繰り返している。しかしこの様々な調号の繰り返しは決してBの型のような全調提示的な様相は示さず、むしろシャープ・フラット0から1コに集中している。このことからタイプとしてはAに近いけれど、曲数が多いために教本の最後に向けての調号順次提示型になっていないものと考えられる。

2. 臨時記号を用いる場合

図3は各教本中にCシャープ、Dシャープなど臨時記号によって黒鍵にされる場合がどれくらいあるかを調べたものである。各楽譜において右手のパートのみ調べ、全曲を100として比率で表わしている。そして同一曲中に同じ音に対する同じ臨時記号が何度用いられても、その黒鍵を1回とし、つまり1曲として全曲に対する比率で示している。またCシャープとDフラット、DシャープとEフラットのような異名同音は1つにまとめて集計した。それは記譜上異なるすべての音を分析因子にとると、分類が多すぎて全部低い比率になり比較しにくいこと、そして記譜上の違いでなく実際に1オクターブ内の5つの黒鍵が臨時記号によってどのように用いられるかを調べるといった目的のためである。この9つのグラフを5つの黒鍵全体としての用いられ方からみていく。臨時記号がよく用いられる、用いられないという基準をどこに置くかは非常に問題のあるところである。しかしここでは9つのグラフとこれら各教本を調べる中での印象が一致したことから次の3つに分類する。

図 3. 臨時記号



A. 臨時記号の使用が多いもの

これには『シャウム』と『リヒター』『ネヴィン』の3教本が含まれる。その中でまず、『シャウム』をみると最も使用の多いのはDシャープ・Eフラットで27%、次にCシャープ・Dフラットの22%、Fシャープ・Gフラットの19%、Gシャープ・Aフラットの18%、Aシャープ・Bフラットの16%となっている。これら5つの黒鍵の比率を合計すると102%となり、ほぼ1曲に1回の割で臨時記号が用いられることになる。次に『リヒター』について、異名同音をシャープの呼び方でのみ示すと、Gシャープ29%、Cシャープ27%、DシャープとFシャープが同じく20%、Aシャープ15%である。各臨時記号を合計すると111%となり、1曲に1回以上の割で臨時記号が用いられることになる。『ネヴィン』も各臨時記号の用い方は資料2に示す通りで、5つの黒鍵の比率を合計すると105%になる。これはやはり1曲に1回の割で臨時記号が用いられることを示す。

B. 臨時記号の使用が少ないもの

これには『オックスフォード』『トンプソン』『ペース』『バスティエン』の4教本が含まれる。その中でも『オックスフォード』は臨時記号が最少であり、Gシャープ9%、Dシャープ7%、CシャープとFシャープが共に6%、Aシャープ4%となっている。これら各比率を合計すると32%となり、3曲に1回弱の割で臨時記号が用いられることになる。また4教本の中で比較的臨時記号の多い『トンプソン』は5つの黒

鍵比率を合計すると51%になる。これは2曲に1回の割で臨時記号が用いられることを示す。各教本の各臨時記号の使用状況については資料2に示す通りである。

C. 臨時記号の使用がA・Bの間であるもの

これは『アーロン』と『グローバー』で各臨時記号がどれも10~20%の間で使用されている。『アーロン』についてみるとDシャープ18%, Cシャープ17%, Gシャープ16%, Fシャープ12%, Aシャープ10%である。一方『グローバー』はGシャープ16%, Fシャープ14% Dシャープ13%, Cシャープ12%, Aシャープ11%である。各臨時記号の比率を合計すると、『アーロン』が73%, 『グローバー』が66%になり、それぞれ4曲に3回, 3曲に2回の割で臨時記号が用いられることになる。

以上, A・B・Cに分類して述べたが, 最初に断わったように同一曲中にある同じ黒鍵であれば臨時記号が何回用いられても一曲として集計しているのだから, 実際の楽譜上ではもっと数多く臨時記号は用いられている。

次に臨時記号によって使用される黒鍵の多少を, 5つの黒鍵の間で比較してみる。図3からも明らかなように顕著な使用傾向はみられない。しかし, 5つの黒鍵が同じような比率で用いられる6教本と, 使用の多い, 少ないの差が10%以上ある3教本に分けられる。まず差の多い3教本は『リヒター』『シャウム』『ネヴィン』であり, 共に臨時記号による黒鍵使用の多い教本である。あとの6教本は黒鍵間の使用の差が少なく, 同時に臨時記号も比較的少ないものである。このことから黒鍵使用の多少はある程度臨時記号の用い方が多くないと明確にならないといえる。また, どの黒鍵が集中的に用いられるかについては様々である。すなわち『シャウム』ではDシャープ, 『リヒター』はGシャープ, 『ネヴィン』はDシャープ, Fシャープ, Gシャープに集中している。

3. 黒鍵の指使いについて

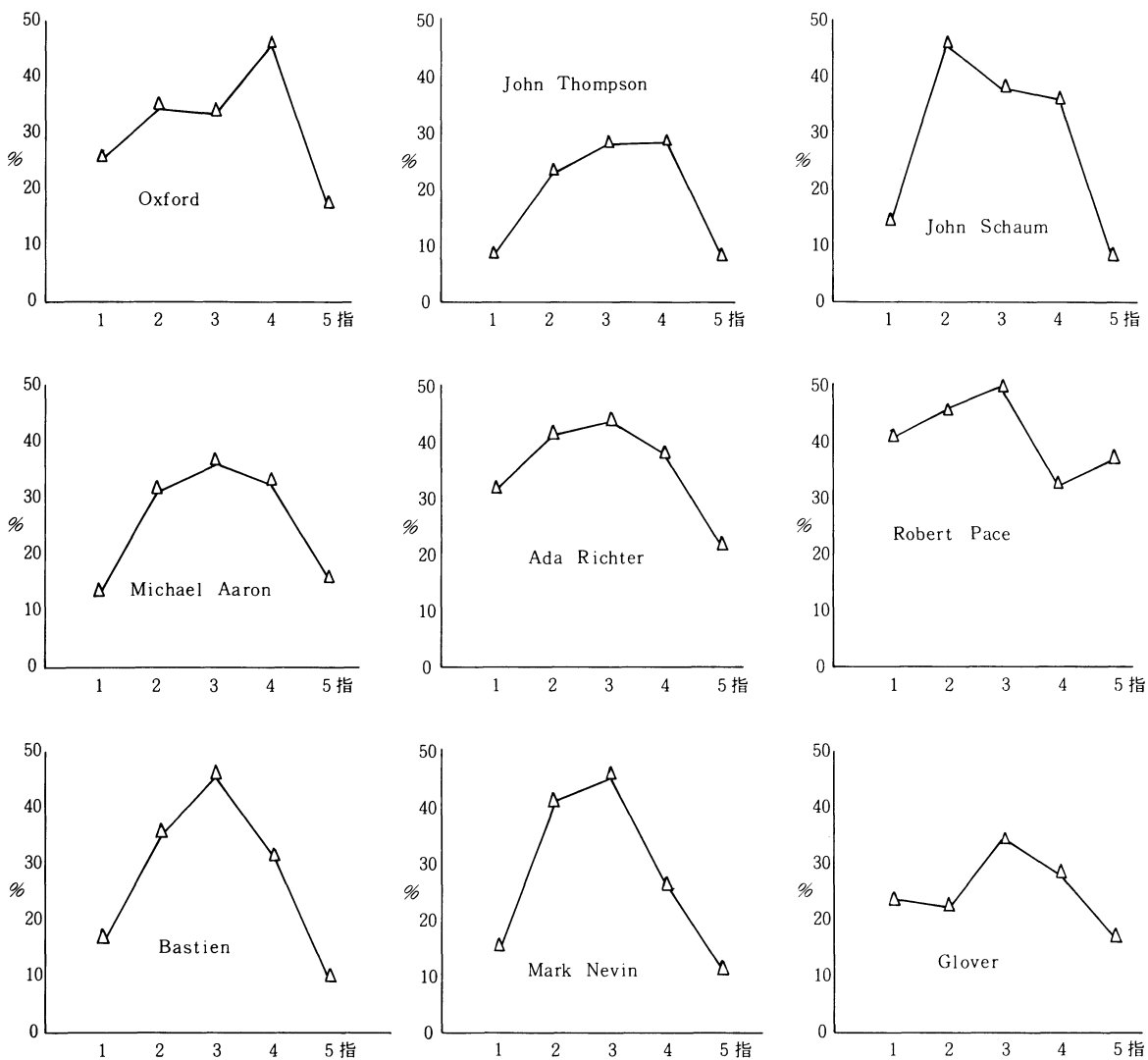
図4は右手について黒鍵の指使いを調べたものである。横軸に右手1から5の指をとり, たて軸に全曲に対する比率をとっている。臨時記号の場合と同じく, 同一曲中の同指による黒鍵は何回あっても一曲として集計し, 各指の黒鍵を押える機会が全曲中で何曲にあるかを比率で表わしている。この場合, 黒鍵は調号によるものも臨時記号によるものもすべて含まれる。

図4から明らかなように, nadらかな山形の『トンプソン』『アーロン』『リヒター』, 角ばった山形の『オックスフォード』『バスティェン』『ネヴィン』というように形の上で様々である。また用いられる比率の高い, 低いということでも全体的に高い『リヒター』や『ペース』, 比較的低い『トンプソン』, あるいは高い指使いと低い指使いに分かれる『シャウム』というようにいろいろである。その中で注目したいのは『ペース』と『グローバー』である。これらは1の指, 5の指の用い方が2・3・4の指より高くなっている。これは1や5の指はなるべく黒鍵にしないというこれまでの考え方を打ち破るものと考えられる。

『ペース』をみると5つの指ともに黒鍵になる率が高く, 3指は約50%つまり2曲に1回の割で黒鍵を押えている。また1指は41%, 5指は37%であり, この比率は4指の32%より高い。一方『グローバー』は全体的黒鍵使用が『ペース』ほど高くはないが, 黒鍵となる比率が1指で24%となり2指の22%よりわずかではあるが多くなっている。

なお9教本について5指までの黒鍵となる比率は資料3に表わした。

図 4. 黒鍵の指使い



IV 考察とまとめ

以上の分析結果を考察するにあたり、我々になじみの深い『バイエル』と比較してみる。図5は調号使用を表わしているが図1に比べて一層0への集中度が高い。そして調号の種類は少なく、限られることがわかる。また図6よりはシャープ・フラット0の曲が大半を占め、それらの調号が現われるのは教本の最後に片寄っていることが明らかである。調号提示は順次、シャープ・フラットの数が増えていくが、0の期間に比べ、そのふえ方が急激に変化している。『バイエル』は調号の用い方はシャープ・フラット0が中心であり、教本の最後の部分で様々な調号を用いるがその種類は少なく、また調号の変化が激しいといえる。それに比べるとアメリカの9教本はシャープ・フラット0が多いものでも調号の用い方は教本全体に、より平均

化されており、種類も多いといえる。

また『バイエル』の臨時記号や黒鍵の指使いについては、図7、図8のようになり、臨時記号はほとんど用いられないことが明らかである。したがって黒鍵となるのは調号によるものがほとんどであり、その指使いは2・3・4指の約10%であることがわかる。

以上のように、『バイエル』と比較するとアメリカの9教本は黒鍵の使用が多いことを認識した上で分類してみる。

表1より調号使用と提示の仕方の間には関連があり、集中型は順次提示をし、分散型は全調提示といえる。また臨時記号と調号使用をみると調号分散型の3教本が臨時記号は少なく、調号集中型の中の『シャウム』『リヒター』『ネヴィン』が臨時記号が多くなっている。ゆえにこのことから黒鍵の使用法について、9教本を次のように分類できる。

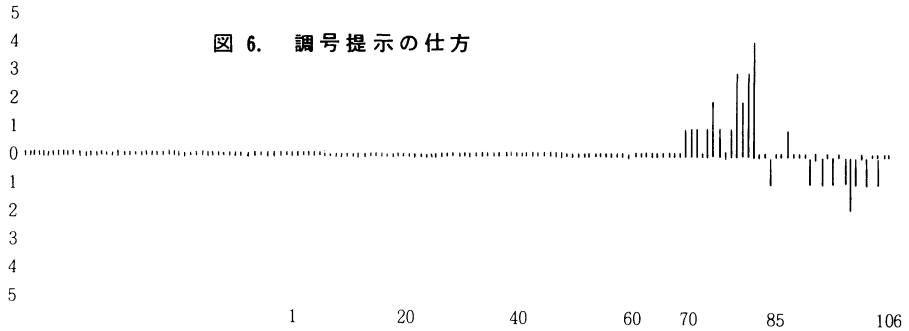


図 6. 調号提示の仕方

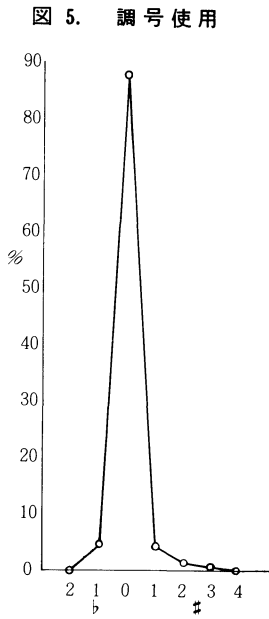


図 5. 調号使用

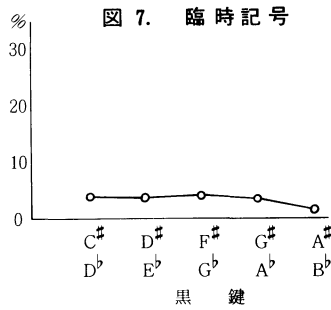


図 7. 臨時記号

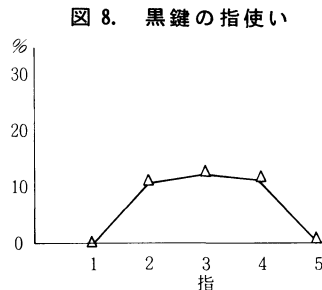


図 8. 黒鍵の指使い

表 1. 黒鍵使用について

教本	方法		調号			臨時記号		
	集中型	分散型	順次提示型	全調提示型	一部順次提示型	使用多	使用少	中間
Oxford		○		○			○	
Thompson	○		○				○	
Schaum	○		○			○		
Aaron	○		○					○
Richter	○		○				○	
Pace		○		○			○	
Bastien		○		○			○	
Nevin	○		○				○	
Glover	○				○			○

- a. 調号順次提示・臨時記号型……『シャウム』『リヒター』『ネヴィン』
- b. 調号分散・全調提示型……………『オックスフォード』『ペース』『バスティエン』
- c. 調号・臨時記号型……………『トンプソン』『アーロン』『グローバー』

次に黒鍵の指使いについては1や5の指よりも2・3・4の指が黒鍵となる比率が高いといえる。しかし『ペース』や『グローバー』のように1・5の指を黒鍵に多く用いるものもある。ロバート・ペースは調号でも黒鍵でも初めから全部を示す方が、指導上あるいは学習上能率がよいという理念にたっていることを考え合わせると、意図的に1や5の指を黒鍵に多く用いていると考えられる。また初めから全部を示すという考え方はバスティエンも同じであり、導入段階から白鍵にも黒鍵にも慣れることが大切だとする。それゆえ『バスティエン』も全調提示型で初めから様々な調号が用いられている。

今回、アメリカの教本を分析した結果、黒鍵使用の方法について3つに分類できた。その中には『バイエル』と同じ扱いのものもあるが、『バイエル』より黒鍵の使用は、はるかに多く、また提示される調号も種類、提示の仕方ともに複雑であることも明らかにされた。

以上、“黒鍵の使用”という面から教材を分析したが、以上の他にリズムや音価など別の角度からも分析し、多方面から教材にアプローチすることが必要と思われる。

なお本研究は岡山県大学音楽教育学会（1981年11月27日、於 新見女子短期大学）にて口頭発表したものに加筆修正したものである。

注・参考文献及び資料

- (1) 野村幸治 ピアノ小集団学習 音楽教育学 (第8号 1978年)を参照。
- (2) 西園芳信 ピアノ指導についての実践的研究 季刊音楽教育研究 (1978年 夏号)を参照。
- (3) 山根民江 電動オルガンによる集団授業の試み 季刊音楽教育研究 (1980年 夏号)を参照。
- (4) 萬英子・塚本宏子 児童教育学科に於けるピアノ指導のあり方について 聖母女学院短期大学研究紀要(第10集 昭和56年)を参照。
- (5) 調性の不明な曲もあり、長調・短調で表わせない場合があるので、このように調号の種類と数とで示す。
 - 大澤欽治 ピアノ奏法の基礎指導 富山大学教育学部紀要第24号 昭和51年
 - 八田 惇 ピアノ演奏法に関する一考察 大阪音楽大学紀要第17号 昭和53年
 - 小木谷長谷子 ピアノ入門教材における一考察 鶴川女子短期大学紀要2号 1979年
 - 笠井かほる ドイツのピアノ教則本の傾向と考察 音楽教育学第7号 1977年
 - 神保洋子 話題の全調メソッドを追って ムジカノーヴァ 1980年5月 pp44～49 音楽之友社
 - 木村美江 全調メソッドとその指導効果について ムジカノーヴァ 1980年5月 pp50～53 音楽之友社
 - 音楽之友社編 世界のピアノ教育とピアノ教本 ピアノ講座2 音楽之友社 昭和56年
 - 音楽之友社編 ピアノ初歩指導の手引I ピアノ講座3 音楽之友社 昭和56年

資料 1. 調号使用状況

(数値はすべて%である)

	♭6コ	♭5コ	♭4コ	♭3コ	♭2コ	♭1コ	0	#1コ	#2コ	#3コ	#4コ	#5コ	#6コ
Oxford	1.0	1.0	4.9	4.9	3.9	20.6	19.6	24.5	11.8	6.9	2.9		
Thompson			2.7	1.4	2.7	13.5	55.4	13.5	5.4	2.7	2.7		
Schaum				1.0	2.0	27.0	47.0	18.0	3.0	2.0	1.0		
Aaron				4.8	6.0	7.2	63.9	10.8	6.0	1.2	1.2		
Richter				4.3	6.0	13.7	48.7	22.2	4.3	2.6	0.9	0.9	0.9
Pace	2.5	11.0	2.5	4.9	1.2	17.3	21.0	18.5	11.1	2.5	6.2	1.2	
Bastien		2.8	2.8	3.6	4.8	17.7	35.1	17.3	11.3	2.0	2.0	0.4	0.4
Nevin			1.1	3.4	2.3	10.3	62.1	11.5	3.4	3.4	1.1	1.1	
Glover			0.8	1.2	2.9	14.5	53.9	16.2	8.3	2.5	0.8		

資料 2. 臨時記号使用状況

(数値は全曲に対する%を示す)

教本 \ 臨時記号	C [#] ・D ^b	D [#] ・E ^b	F [#] ・G ^b	G [#] ・A ^b	A [#] ・B ^b
Oxford	5.9	6.9	5.9	8.8	3.9
Thompson	9.5	10.8	10.8	13.5	5.4
Schaum	22.0	27.0	19.0	18.0	16.0
Aaron	16.9	18.1	12.4	15.7	9.6
Richter	26.5	19.7	19.7	29.1	15.4
Pace	11.1	9.9	9.9	13.6	4.9
Bastien	10.9	10.9	9.2	7.7	3.2
Nevin	16.1	25.3	24.1	25.3	14.9
Glover	12.4	12.9	13.7	15.8	10.8

資料 3. 黒鍵の指使用状況

(数値は全曲に対する%を示す)

教本 \ 指使い	1指	2指	3指	4指	5指
Oxford	25.5	34.3	33.3	46.1	17.6
Thompson	8.1	23.0	28.4	28.4	8.1
Schaum	14.0	45.0	38.0	36.0	8.0
Aaron	13.3	31.3	36.1	32.5	15.7
Richter	31.6	41.0	43.6	37.6	21.4
Pace	40.7	45.7	49.3	32.1	37.0
Bastien	17.3	35.9	46.4	31.5	14.9
Nevin	16.1	41.4	46.0	26.4	11.5
Glover	24.1	22.4	34.9	28.2	17.0